

2022.11.29.

T.Kobayashi

大相撲九州場所観戦日記

～28年ぶりの巴戦を制したのはこの人～

●11月17日 <序盤終了>

4日目でもう全勝力士が一人もいなくなってしまった。先場所よりさらに悲惨な状態になっている。序盤（5日目まで）を終えた状態で、豊昇龍・御嶽海・高安・錦富士・阿炎・阿武咲・王鵬・一山本の8力士が1敗で先頭集団を形成。この中に役力士は二人しかいないので、また平幕優勝かもしれない。大関から陥落した御嶽海は、今場所10勝以上をあげれば大関に復帰できるという特例の場所なので、「とりえず10勝すれば・・・」というのが正直な心境だろうから、優勝を狙う気などないだろう。豊昇龍は稽古の成果が出はじめてきており、体幹がしっかりしてきた感じがする。高安の強烈な攻めに敗れたが、その他の対戦では「らしさ」が出ている取組が多かった。これまでも、突然崩れるということがあったので、もう少し様子を見ないと何とも言えない。

今場所の高安は、頭であたったり、かちあげがあたりで立ち合いの踏み込みが良く、相手の姿勢を崩す威力が出ている。攻める力の有効性を見ると他の力士を大きくしのぐものがあるが、多くの古傷を抱えており、いつ何が吹き出してくるのかわからない力士なので、注目はするものの期待の領域にまでは至らない。

基本を押さえた正統派四つ相撲の錦富士は、巧さの上にさらに強さを感じさせるようになってきた。相撲は体の大きさが決め手ではないことを身を以て示すような取り口の巧さが光っている。翠富士・平戸海と並んで将来を期待できそうな若手力士の一人である。どこまで勝ち星を伸ばして行けるか楽しみな存在だ。

阿炎・阿武咲・一山本は突き押しをベースにした相撲なので、どこでつまずくかわからず、現時点では賜杯の行方を左右する働きはする可能性があるという程度の見方に留めておくべきだろう。

これまでよりも立ち合いの踏み込みが鋭くなった王鵬がひと皮むけたのか、偶然の出来栄なのかまだ読み切れない。これまでの場所では「何を武器としようとしているのか」がわからない力士だったが、そろそろ「自分の相撲」を発見すべき時期に来ており、しばし注目して見たい。

●11月20日 <中日終了>

中日を終えて先頭集団の中でも、おおかたの人が期待していたであろう御嶽海が脱落。それだけならば良いが、「10勝すれば大関復帰可能」の特例に向かう流れからも脱落の気配の4勝4敗。

正代も同じ路線を歩んでおり、いよいよ「一横綱・一大関」の時代の到来が現実のものになってきた。何場所か前のレポートの中で懸念事項として挙げたことがある「横綱・大関不在」ももう笑い話ではなくなってきた。

さて、今場所の先頭集団も少しずつ崩れが始まり、関脇の豊昇龍と平幕の高安・阿炎・王鵬の計四力士になってしまった。

豊昇龍は、これまでの場所に比べると、足腰の構えが良く立ち合いの踏み込みが強くなった。低い姿勢を保つことや矢継ぎ早の様々な攻めが光っており、明らかに自信を付けてきたことが感じられる。決まり手は多彩で、どんな場面でも「次の手」を考えながら動いているように見える。

高安は、足の開き具合と腰の位置の安定が見られ、はたきやいなしに動じず、相手に圧力をかけ続ける場面が目立っている。立ち合いで軽くかち上げて相手を浮き上がらせておき、その間に体ごと相手に圧力をかけながら手が伸びている。前進圧力は攻めの基本であることを示しており、豊昇龍とは違う視点で「強さ」が感じられる。

阿炎も、阿炎らしさで星を伸ばしてはいるが、腰高で棒立ちの立ち合いなので急所を突かれる可能性が多分にある。阿炎の相撲の特徴で変えようがないことだと思うが、4日目に敗れた対阿武咲戦に見

るように、小柄で素早い立ち合いの力士には注意を要する。がら空きの下半身に素早く突っ込まれたり食いつかれたりすれば一溜まりもないので、今後も立ち合いの素早さを心がけていく必要がある。王鵬は、立ち合いで強く踏み込んで突き押しで攻めながら決め手を見つけていくという相撲の形が定着してきた。これまでの場所に比べると明らかに進化してきている。

先頭集団の四力士の他に、霧馬山・翔猿・錦富士・平戸海の相撲が光っており、ベテランの竜電・妙義龍なども良い動きをしているので、賜杯や三賞の行方に大きな影響を与えそうな感じがする。

成績	大関	関脇	小結	平幕力士
7勝1敗		豊昇龍		高安・阿炎・王鵬
6勝2敗	貴景勝			錦富士

●11月22日 <中盤終了>

9日目(11月21日)になって動きが出てきた。

錦富士が阿炎の急所を突いて素早い攻めで勝ち星を挙げた。高安も明生の鋭い突進にたまらず敗退。先頭集団は少しずつ形を変え始めた。

一方では、貴景勝は翔猿に攻められて3敗に後退、正代は全く戦意喪失の相撲で大栄翔に敗れて5敗、御嶽海も5敗目を喫していよいよ「大関という存在の危機」に向かって動きが始まった。

そして10日目になると好調力士同士の取組も組まれ始めて先頭集団は崩れてきた。

中日まで先頭を走ってきた四力士は二つに割れて、10日目を終った状態で1敗は豊昇龍と王鵬の二力士になり、後を追うのは2敗の高安と錦富士で、この四力士に絞られた感じになった。

成績	大関	関脇	小結	平幕力士
9勝1敗		豊昇龍		王鵬
8勝2敗				高安・錦富士

●11月23日 <11日目>

これまで低い位置からの勢いのある立ち合いで「生まれ変わったか?」と思われた王鵬は、これまでの欠点をまとめて再現したような無様な立ち合いで阿炎に飛ばされてしまい2敗に後退。

戦意喪失状態の御嶽海を軽く運び出した豊昇龍が単独トップになった。

錦富士との2敗同士の対決を力強い相撲で制した高安がベスト3に残った。

成績	大関	関脇	小結	平幕力士
10勝1敗		豊昇龍		
9勝2敗				高安・王鵬

NHKのテレビ中継のアナウンサーは早くも「豊昇龍の大関取り」を騒ぎ立て始めた。こうした動きが悪影響をして、相撲協会を「粗製濫造」に走らせた上に俎上に上がった力士を駄目にしてしまっているという現実を認識していないようだ。前半の解説者として登場した舞の海が呟いていたが、アナウンサーはその話には乗らなかった。舞の海の呟きはこうだった。

「三場所の星数だけで大関昇進を決めてきたことが、弱い大関を産み出す結果になっているかもしれないので、もう少し時間をかけた評価も必要な時期に来ているのかも・・・」

全く同感、私は何年も前からそう感じている。

●11月24日 <12日目>

豊昇龍・王鵬戦が組まれた。そして王鵬がこれを征したことで、1敗はいなくなった。3力士が2敗に並ぶ形となり、その後には一旦後退していたが3敗を堅持していた貴景勝と阿炎が無気味な存在となってきた。

●11月25日 <13日目>

高安は王鵬を軽く片付けて単独トップに立ったが、豊昇龍は貴景勝の猛突進に屈してさらに後退。豊昇龍は12日目以降精彩を欠く相撲っぷりになってしまった。高安がやや有利な状況とは言え、ぴったり付いている貴景勝と阿炎が鍵を握る存在になってきた。

成績	大関	関脇	小結	平幕力士
11勝2敗				高安
10勝3敗	貴景勝	豊昇龍		阿炎・王鵬

●11月26日 <14日目>

豊昇龍は阿炎にも敗れて遂にこの表から消え去った。前頭13枚目の王鵬は大関貴景勝との取組が組まれ、良い所なく敗退。若手の活躍もここまでという結果となった。高安がやや有利であることは変わらないが、千秋楽の高安・阿炎戦が賜杯の行方を大きく左右することになった。

成績	大関	関脇	小結	平幕力士
12勝2敗				高安
11勝3敗	貴景勝			阿炎

ここまで来ると三賞の行方も気になるが、私案として候補力士をあげて見た。

*殊勲賞候補＝高安・阿炎（いずれも優勝した場合）

*敢闘賞候補＝王鵬・阿炎・高安・平戸海

*技能賞候補＝竜電・平戸海

●11月27日 <千秋楽>

さて、いざ千秋楽本番となると、又又思いがけない出来事が待っていた。本割りで高安は阿炎に突きまかれて敗退し、優勝決定戦になった。しかも貴景勝も勝ち残ったため、三力士による巴戦ということになってしまった。殆どの方が高安有利と見ていたし、判官鼻肩のような様相で「高安に優勝させたい」と言う人も数多く現れる状況の中で、相撲記者クラブの面々は高安の優勝を思い描き「殊勲賞＝高安、敢闘賞＝阿炎」と決めてしまった。優勝決定戦は三力士による巴戦なので、くじ引きが行なわれ、緒戦は高安対阿炎となった。軍配が返った途端に阿炎の胸めがけてかち上げながら頭で当たった高安が、そのまま土俵に蹲ってしまった。後刻の情報によれば、首を痛めたとのことだった。次戦で貴景勝も撃破した阿炎が、いとも簡単に決定戦を制してしまった。三賞は、殊勲賞＝高安、敢闘賞＝阿炎、技能賞＝豊昇龍 ということになったが、殊勲賞は平幕優勝した力士に与えた方がわかりやすいので、殊勲賞＝阿炎、敢闘賞＝高安とした方が良いように感じた。また若手力士の活躍を評価して、王鵬・平戸海あたりに敢闘賞を授与するのも良かったかもしれない。

●蛇足のおまけ

14日目が終わったところで、高安の優勝を想定して用意したのだが・・・

折り込み都々逸試作 「たかやす」

たたくまわしがかんないひびき やけにきらめくするといめ
 たちあいふみこみかちあげまえへ やすまずせめこむすきもなく
 たたかいおわればかわいいかおの やさしさあふれるすもうさん

以上